

研究結果

1. 『啓迪集』と『医宗心領』の比較研究

日本医学中興の祖とされる曲直瀬道三（1507 - 1594）の代表作『啓迪集』には、中国の64にもものぼる医書から文章が引用されている。本研究では、まず、この『啓迪集』とベトナムを代表する18世紀の医書『医宗心領』との比較研究を実施した。この結果、両国の医学は漢字圏の文化交流という共通の背景下で形成されていたこと、両書とも中国医書から強い影響を受けつつも、自国の風土と疾病に適応した独自の発展を遂げていること、と云った共通点が認められた。一方では、両書には約200年という時代の隔たりがあり、『啓迪集』は16世紀の中国医書の影響を、また『医宗心領』は18世紀の中国医書の影響をそれぞれ強く受けている。更には、両国それぞれの独自の発展過程の相違や、『啓迪集』は8巻の医学全書、『医宗心領』は66巻の医学叢書といった著述目的の違いも認められた。

2. 西洋医学受容の比較研究

明治政府は日本を早期に強国とするため、西洋の科学技術を能動的且つ積極的に導入した。医師の育成も西洋医学に一本化したため、当時の漢方医師は反対闘争を行ったものの、明治末期には漢方医師の数は激減した。その一方で、漢方を処方する西洋医師も徐々に増えてきたため、結果的に、伝統医学も現在まで存続することになった。他方、フランスの植民地となった当時のベトナムは、西洋医学を飽くまでも「受動的」に受容したため、当然のことながら、伝統医学は停滞することになった。こうした歴史的背景により、日本の伝統医学は、同じ漢字文化圏であっても、中国・韓国・ベトナムとは違う様相を呈している。こうした漢字文化圏の各国が、西洋医学を取り入れた段階で、それぞれの伝統医学がその後どのように存続し、発展していったのか？は、今後の研究テーマとしたい。

3. その他

本研究では、日本の西洋医師が初めて漢方医学を提唱したといわれる書、和田啓十郎の『医界之鉄椎』（1910年初版、1915年増補改訂版）も研究対象とした。同書はベトナムの陳徳心氏によりベトナム語訳が出版されており、同氏のその後の思想に大きな影響を与えている。一方、中国語版は丁福保氏の翻訳で、1911年と1920年に上海医学書局から出版されている。これらはいずれも日本・中国・ベトナムにそれぞれ影響を与えた書であり、今後の課題/研究テーマとして、引き続き研究対象としていく所存である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

テーマ: 「日本の『啓迪集』について」

発表者: Nguyen Thi Duong

場 所: ハノイ 漢喃研究所

日 時: 2010年12月25日

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

『漢喃雑誌』2011年4号(8月発行予定)に、
論文テーマ「日本の『啓迪集』について」として掲載予定

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)